
俺は彼女を壊したようだ。

枝切り包丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は彼女を壊したようだ。

【Nコード】

N1026Z

【作者名】

枝切り包丁

【あらすじ】

なんか図々しい神様に転生させられたんだが……今回の人生は諦めよう、
みたいな話。

0・転生からこれまで、

「悪い、今からお前の人生台無しにする」

私の目の前で、彼はそう口にした。

俺がこの世に生を受けたのはコレが二回目になる。

それは俺、相良紅助が転生者と云うことだ。

ある日俺は死んで神と名乗る人物に出会った。

目の前の人物が自らを神と名乗った瞬間から俺の頭の中では（死亡
「神が間違えて殺した」ごめんなさい変わりに転生させてやる）な
んて式を浮かべていたが自称神は神様の能力で俺の思考を読み一
笑した。

曰わく《神である我が何故貴様のような小さきものに頭を下げねば
ならぬ》

まあ、人生・・・と言っても既に死んでいたが・・・そんなものだ
った。

それから神とやらは呆然とする俺を気にせず何やら説明を始めた。

《生まれ直す代わりに我の企画した物語の俳優となれ》

そんなふうには神は言った。

俺としては結局転生モノかよ、みたいな肩透かしを食らったためどうにも言葉にしにくい面持ちのまま首を縦に振った。

そして神が俺に行かせるといった世界が《魔法少女リリカルなのは》の世界だった。

偉そうな喋り方して魔法少女かよ、と文句を浮かべて神に殴られた。

こうして俺は生き返るわけでもなく、生まれ変わるわけでもなく、生まれ直した。

自分の名前も容姿も、両親の名前も容姿も変わらずなかった。

ただ母が元魔法少女で俺も魔法少年候補と言う設定が書き加えられただけだった。

生まれ直してから小学校の三年生になるまではとても平和な日々だった。

ただこの世界の主役である高町なのはと仲が良く母から魔法の教育をされている以外は普通の少年として育った。生まれ直す前の知識を垂れ流す分けでもなく他人より優れた何かを魅せる分けでもなく。

この人生が神に見られているというだけで俺は今回の人生を諦めたのだ。まあ、次回があるわけでもないが、

そのため高町がPT事件に巻き込まれた時もあまりやる気が出なかった。

無視する、という手もあったのだがユーノのSOS信号を母が傍受してしまったため失敗した。

結果としては高町を全面に押し出しそれをフォローするということになり原作と差ほど変わりのないものだった。

この時点で俺の立ち位置はユーノともう一人誰かがいる、みたいな感じだ。

その年の冬、闇の書事件もそんな感じだった。

八神家の小さいのに襲われたのはを守ろうとしたらボコボコにされた上に魔力を吸い取られ気が付けば事件が終わっていた。

辛うじて夜天の書の管制人格、リインフォースだったかを目にすることができた程度で立ち位置はユーノ以下のものだった。

それから数年、俺は高町に金魚の糞のように生きてきた。

魔法関係者の中で母を抜くと最も仲がよく信頼出来る人物だったからだ。

で、俺は消えかかっていた記憶の中からあることを思い出した。

恐らく高町がエースオブエースへと至る大切なイベント、

高町なのはが墜される。

それを思い出したのはとある演習中、

高町が可笑しな形をした敵に襲われるのを見て、だった。

目を覚ますとここが病院だと一目でわかるほど白い天井が見えた。
起きあがるうとして後頭部で枕を叩いた。

両腕が無かった。

まあ、両の腕とも斬り落とされる瞬間を目にしていたのでそれほど驚きは無かった。
どちらかという指の感覚が綺麗に無くなっていることに驚いた。
指がないってこんな感覚なんだ、程度には。
肩の先から少しだけ残った腕でベットをよじ登り何とか上半身を持ち上げた。

高町がいた。

ベットに寄りかかり寝息をたてるそいつを見て思わず苦笑する。

何とか高町だけは守れた。

高町が襲われるのを見た瞬間俺は久しぶりに本気を出したと思う。
高町の前へ飛び出し敵と一瞬にらみ合った。

ここで短い戦闘があったが割愛。

俺が一方的にやられ

る話なんて話したくない。

両腕を斬り落とされたのに俺は笑っていた。

両腕がないくせに高町を守ることが出来て正直に嬉しかった。

俺にとって高町が両腕を失っても守りたいと思うほど大きな存在
だったということには驚いた。

6

手がないため足で高町の体を揺する。

若干足蹴にしていりようで少し躊躇ったが仕方ないと割り切った。

「……んっ」

数回揺すると高町は少しだけ呻いて体を起こした。

こちらを見る。

やっぱり高町は俺を見て泣いた。

1・お見舞い

俺が目を覚まして最初に面会に来たのは八神家の小さいことヴィー
ータだった。

彼女はやけに俺を心配していて両腕が無くなったのを見て何とかな
らないのかと医者に突っかかっていた。

まあ、切り落とされた両腕の一片でも残っていたらクルーニングで
直せたかもしれないがあ敵の野郎はデバイスを破壊するため俺の
両腕ごと灰にしまった。

勿論灰は風に吹き飛ばされたし短くない付き合いだったデバイスも
修復不可能なほどに破壊されたそうだ。

ヴィータは医師の説得に半泣きになりながら頷いていた。

彼女が泣くなんて初めて見たのでその原因である俺は何だが肩身が
狭いような気分だった。

次に来たのがフェイト、フェイト・T・ハラオウンだった。

彼女は病室に入るなり俺と高町を見てなんと声をかけたらいいのか
分からなくなつたのか口をパクパクと開閉していた。

その困つた様子が彼女らしく苦笑するとそれに彼女は安心したら
しく「大丈夫？」と控えめな声で聞いてきた。

大丈夫なわけないだろ？なんてテストロツサをからかってやると怒
り出して病室から出て行ってしまった。

不謹慎だったのか？

で、次が八神家。

何だか闇の書のことを思い出して入ってきた瞬間笑ってしまったらシグナムさんに怒られた。

闇の書のとくと違ったのはヴィータが先に来ていなかったこととリインフォースがいなかったことだ。

彼女にはしつかりとお別れが出来なかったため少し胸が痛む。

八神家の人物はいつも通りバラバラなのにどこか揃って見えた。

シグナムさんは黙ってこちらを見ていてシャルさんは泣きそうなほど心配をしていた。ポチ、もといザフィーラは少し残念そうな顔をしていた。

最後に八神は顔を真っ青にしてこちらを真っ直ぐ見つめていた。

どうも闇の書のことを向こうも思い出しているようだった。

まあ、闇の書の犠牲者に会うのは俺が一番最初だったらしいし軽いトラウマにでもなっていたのだろう。

八神家のみんなはそれぞれ俺を心配していて、それぞれの言葉を残して帰って行った。

次に来るのはユーノかクロノかな、なんて思っていたが二人とも仕事事が忙しいらしくしばらくは面会にこれないらしい。

それで結局次に来たのは……

俺と高町の両親だった。

次元世界を渡るのに時間がかかったらしい二組は両極端な表情を浮かべていた。

凄く申し訳のない表情と凄く嬉しそうな表情。

勿論前者が高町の両親で後者が俺の両親だ。

俺の両親は凄くいい笑顔で俺に近づくと「紅助、よくなのはちゃんを守った。よくやったな」なんて肩を叩いていう父と「コウちゃんには私達の誇れる魔法少年よ」なんて笑顔を投げかけた母は高町の両親を置いて病室から出て行った。何しに来たんだあいつ等。

病室の人口が高町家に傾いた今、俺の肩身は酷く狭いものとなっていた。

「すまない」

最初に口に出したのは高町の父、土郎さんだった。

彼は一度頭を下げるとなのはを病室から追い出し俺に話し出した。

内容は酷くあまり纏まったものじゃなかった。

だけど俺はそれを黙って聞いていた。

幾度と無く頭を下げる土郎さんと桃子さんの背中がやけに小さく見えただけからだ。

二人は謝るだけ謝って俺に背を向けた。

言うだけ言って帰るってなんかずるい、なんて思っていると扉の前で桃子さんが振り返った。

「なのはを助けてくれて、ありがとう」

その一言で何故か笑みが止まらなくなった。

次に扉を開いたのは戻ってきた高町だった。
高町は瞳にまだ涙を溜めたまま俺を見つめる。

「…私、コウ君とお話したい」

俺はあまりしたくないなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026z/>

俺は彼女を壊したようだ。

2011年12月4日01時49分発行